

宮崎県総合博物館 第2期中期運営ビジョン評価表（平成29年度）

評価欄の数値は4段階評価数値

内部評価	4…指標を大きく上回った	3…指標を達成できた	2…指標をやや下回った	1…指標を大きく下回った
外部評価	4…期待以上できた	3…ほぼ期待どおり	2…やや期待を下回る	1…改善が必要

(1) 調査研究

項目	評価指標		29年度実績	内部評価			外部評価	
	内容	目標値		評価内容及び改善策	個別評価	総合評価	評価・意見	評価
①調査研究方針・計画	達成率	100%	70%	・学芸課職員が個別に研究テーマを設定して行う個別テーマ研究は、単年度で完了できるものをはじめ、２～５年の複数年にわたるものや水系別総合調査研究の内容を兼ねるものなどがある。概ね当初計画に沿って実施できた。また、その成果を研究紀要に公表することができた。 ・小丸川水系に係る総合調査研究については４年計画の３年目であるが、いずれの部門も計画どおりの調査を進めることができなかった。最終年度となる次年度に報告のまとめができるよう調査の機会を確保する。	2	3	①調査研究報告会は、大変充実していると思う。学校職員等も含め、もっと幅広く参加を募ってもよいのではないかと考える。 ②学芸課職員が全員、平成29年度の成果を調査研究報告会で報告し、研究紀要に成果を発表されていることは評価できる。 ③小丸川水系にかかる総合調査研究について計画通りに調査を進めることができなかったとのことであるが、調査研究報告会及び研究紀要に成果を発表された職員が１名おられたのは良かった。次年度のまとめに向け今後の進展に期待したい。 ④第２期中期運営ビジョン（H27～31）として、県総合博物館がフィールドワークを重視した視点で取り組んでいる「水系別調査」については、平成28年度の外部評価でも意見を述べた。これは、宮崎県の特徴的な自然環境にとって意義在る適切な研究テーマであり、この調査研究の成果を期待している。研究紀要については、内容の充実・発行の定期性など、高く評価している。 ⑤年に１回開かれる調査研究報告会では、館外からの参加者の意見や進言があれば有益と思われるが、外部からの参加者数が限られており、現状については少し残念に思う。 ⑥通常業務と合わせて課題研究に取り組み、かつ研究成果をまとめられて発表されていることはすばらしいと思います。 ⑦調査研究方針・計画は３年目の段階で計画通りではないが、最終年度の調査で機会を確保できるとのことで期待している。成果の公表においては計画通り推移しており、展示等にも活かせると思う。特に県内の他の文化施設等と協働して報告会を開催していることは、宮崎県の博物館をリードする成果だと思う。	3
②調査研究成果の公表	研究紀要の発刊	年１回	研究紀要 １回	・３月に15論文からなる「研究紀要第38輯」を発行し、本県の自然史、歴史等の解明に一定の貢献が期待できたと考える。 ・今後も各種の調査研究成果を、報告書等により県民に適時適切に提供していくとともに、展示や教育普及活動に活かしていく。	3			
	調査研究報告会	年１回	１回	・３月に職員11名が調査研究の結果や収蔵資料に関する内容、展示手法や教育普及に関する内容についての報告を行い、博物館協議会委員や県内の他の文化施設職員にも参加いただいた。	3			

(2) 収集・保存

項目	評価指標		29年度実績	内部評価			外部評価		
	内容	目標値		評価内容及び改善策	個別評価	総合評価	評価・意見	評価	
①収集・管理	資料の収集	2,500点 (年平均500点)	4,709点	・資料の収集、図書・文献の収集、デジタルデータの収集、収集資料の整理・登録、デジタルミュージアム登録数の全ての項目について、年平均の目標値を上回った。 内容についても、動物部門ではメガネトリバネアゲハやモルフォチョウなどの外国産をはじめとする多数の乾燥標本、植物部門では世界最大の種子といわれるヤシ科オオミヤシ属の「オオミヤシ」の種子、歴史部門では昭和戦前期の日記や書簡などを含む田邊家資料、民俗部門では椎葉村で唄い継がれてきたひえつき節関連のSPレコードと関連書籍など、今後活用できる価値の高い資料を収集することができた。 ・資料の収集数、資料の整理・登録数については、すでに第2期の目標値は上回っている。今後も引き続き資料の所在情報の収集や館外調査を実施し、重要な資料の収集に取り組むとともに、未登録資料の整理・登録を行う。	4	4	①収集は数値目標を大きく上回った年度となった。数が多いと整理作業が大変であろうと推察している。所蔵資料の活用のためにも、地味な活動であるが整理・登録は大変重要である。未登録資料を含め、作業の進捗を期待している。 ②博物館の業務の一つである資料の整理・記録については、地味ではあるもののきわめて重要であり、重点的に取り組まれるように要望する（例：研究紀要第38輯 P 5～72の甲殻類標本目録、P 105～109の鉱物標本）。 ③収集と保存においては、ハード面のスペース、財政の制限のあるなか奮闘していると評価する。これからも、稀少となる宮崎県内の標本の収集保存を期待する。	3	
	図書・文献の収集	5,000点 (年平均1,000点)	1,211点						
	デジタルデータ（写真・映像等）の収集	5,000点 (年平均1,000点)	1,033点						
	収集資料の整理・登録	4,000点 (年平均800点)	5,722点						
	デジタル・ミュージアム登録数	1,000点 (年平均200点)	211点						
	(合計)	(年平均3,500点)	12,890点						
②保存	燻蒸	年1回	1回	・平成23年度からIPM（総合的虫菌害管理）の考えを取り入れた資料保存に取り組んでいる。平成29年度も全職員によるIPMウォッチング、学芸課担当職員によるトラップ調査（害虫モニタリング）を計画どおり実施することができた。 ・収蔵庫については、適切な環境を維持するために学芸課職員による目視・清掃を毎月実施した。 ・9月の燻蒸期間には、収蔵庫内の燻蒸及び展示室内の簡易燻蒸（殺虫等処理）を計画どおり実施した。その際、常設展示室内の虫菌害発生のおそれがある資料については、収蔵庫に移動して燻蒸し、殺虫・殺カビ処理を行った。なお、燻蒸期間中は立ち入り禁止区域を設定し、館外でのガス漏れ計測を行うなどの万全の安全対策を行った。	3				
	簡易燻蒸（殺虫等処理）	年1回	1回						
	IPMウォッチング	年12回	12回						

(3) 展示

項目	評価指標		29年度実績	内部評価			外部評価	
	内容	目標値		評価内容及び改善策	個別評価	総合評価	評価・意見	評価
①入館者数	本館入館者数	80万人 (年平均16万人)	110,972人	・本館の入館者数については、平成28年度よ3,000人余増加し、11万人台に達することができたものの、ビジョンの目標値はクリアすることができなかった。この原因としては、平成10年度のリニューアルから時間が経過していることなどが考えられる。現在、常設展示室における資料入替え、1階エントランスホールや2階ロビーを活用したロビー展の開催、展示解説員による展示解説や団体案内、催し物の開催などのサービスの向上、エントランスホールでの合唱、書道パフォーマンスの開催など、従前の催しの改善や新たな取組みを工夫しており、さまざまな機会をとらえて情報発信を行っている。今後も引き続き、特別展をはじめ魅力ある企画を展開するとともに、学校等への訪問を強化していく。 ・また、「どこでも博物館」事業や野外講座などのアウトリーチ活動等を通じて、県民に総合博物館の展示や諸活動を周知するなど、本館の有効な活用と集客力の強化を図っていく	2		①目標には届かなかったようだが、努力している姿はよくわかった。民家園の修理も全部終わったようなので、集客力の強化を期待したい。 ②各展示及び入館者における満足度は、アンケート結果のみならず高いと感じられる。本館では目標値には達していないが、決して悪い数字とは思わない。課題は、リピーターをどう増やすか、また入館者がどう“口コミ”で伝えてくれるかだと思う。さまざまな工夫をされているが、とにかく足を運んでもらうことが一番だと思う。呼び込みにかかっている。 ③入館者数がなかなか伸び悩んでいるようだが、展示替えなどのことをもっと発信していったらよいと思う。 ④入館者数については、この10年で目標値を達成したのは平成21年のみであることから、目標値を含め基本的な見直しが必要であるのかもしれない。平成29年度は特別展の観覧者数が伸びなかったが、その他の入館者数（合計数－特別展観覧者数＝51,437人）は過去10年で最高になっており、展示替え、ロビー展、パフォーマンス等の効果があらわれたと考えられる。引き続き取り組みをお願いしたい。 ⑤入館者数が毎年目標を下回っているものの、館としては健闘されていると思う。そもそも16万人という数値目標を見直されてはいかがだろうか。	3
	民家園入園者数	25万人 (年平均5万人)	50,461人	・今年度は県指定文化財の民家2棟の保存修理、防火設備の改修工事等を行ったため、敷地内の一部を立入り禁止区域としたが、国重要文化財を活用した民家園講座をはじめ、神楽公演、民家園春まつりなどの各種事業が好評で、入園者数が目標値の5万人を上回ることができた。 ・今年度で4棟の保存修理が完成したので、来年度から保存活用方法の検討を進めるとともに教育普及に一層努めていく。	3			
②常設展	展示替等回数	年5回	11回	・自然史展示室では、地質部門が鉱物（輝安鉱・紫水晶）、動物部門がアカショウビンの展示替えを、歴史展示室では、ロビーケースを使い、テーマを決めて考古資料である土器・長頸壺・提瓶・坏など5回の展示替えを、民俗展示室では佐土原人形の展示替えを行うなど、収蔵資料の活用に努めた。	4	3	⑥大変見応えのあるさまざまな展示で、目標を大きく上回りすばらしいと思う。実行委員会形式で行うのも、普段とはまた違った分野に広がり、入館者が増えるので、高く評価したい。 ⑦時々見に行くと、とても楽しいし、展示の内容も子どもが興味の持てそうなものをしてくださり、感謝している。これからよろしく願いたい。 ⑧数値目標が上回っていることから、評判がよかったのだろう。今年こそ参観できるよう、時間を作りたい。 ⑨貴館主催の特別展「日本刀の美と歴史」は、これまであまり知られていなかった宮崎の歴史を理解する上で大変良い内容であった。＜柴田委員＞ ⑩ビジョンでは「資料収集や調査研究の成果をまとめた独自の企画展を開催」とあり、昨年・一昨年にはそれがあったが、平成29年度には「研究紀要」にみられる成果と特別展・企画展との関係がうかがえなかった。 ⑪「日本南極観測60周年記念 南極展」 南極観測が始まった頃、日本の観測船が氷に閉じ込められソ連の砕氷船に助けを求めたとか、置き去りにした樺太犬を翌年の観測隊が奇跡的に生き延びていた太郎・次郎を確認したことなど、ニュースや映画で国民の関心を惹きつけていた。近年、南極観測隊についての報道もなく、観測隊の活動など忘れられていた感があるなか、「南極展」はタイムリーな展示だったと思う。南極の気候や生物、地質の紹介、隊員の調査活動や日常生活などの興味ある内容であった。また、南極の氷に触れるコーナーは子どもたちに好評だったようだ。館独自企画で来場者満足度は86％、観覧者2万人余は高評価を与えることができる。 ⑫「日本刀の美と歴史－日州刀の魅力－」 新刀の祖と称される田中国広（綾出身）は都郡伊東氏の家臣、その流れをくむ和泉守国貞とその子井上真改（国貞・真改父子は飢肥藩より禄を給う）は、日向国を代表する刀工である。真改ファンは全国にいとみえ、きよたけ歴史館で常設展示している真改作刀を遠方からわざわざ見に来る人がいた。総合博物館は、真改をはじめ地元刀工の刀剣を多く所蔵しており、刀剣愛好者たちはその展示を待ち望んでいた。さらに近年耳にする「刀剣女子」も待望の、時宜を得た展示であった。アンケートによる満足度97％、マニアックな特別展ではあったが、館独自企画で入館者1万1千人余は十分納得でき、よい企画であった。	3
③特別展	実施回数	年3回	主催事業 4回 貸館事業 3回	・主催事業として、県立美術館を会場に実施した「徳川歴代将軍名宝展」、巡回展「第37回SSP展」、県教職員互助会との実行委員会形式で開催した「南極展」、本館が独自に企画した「日本刀の美と歴史」展の4回、貸館事業として、「絵本とわたしの物語展」（主催：創価学会実行委員会）、「マッケンジーソーブ展」（主催：手をつなぐ育成会）、「宮竹真澄 心のふる里人形展」（主催：リンクス）の3回を実施し、目標をクリアできた。 ・また、本館内で実施した主催事業に係る来場者の満足度は、アンケートによると「良かった」以上が「第37回SSP展」では94％、「南極展」では86％、「日本刀の美と歴史」では97％、全体では92％となり、高い評価をいただいた。	4			
④ロビー展	実施回数	年12回	14回	・本館のロビー展示を部門等のバランスを取りながら実施した。このほか、県その他機関や博物館友の会と連携を取りながら計画的にスペースを活用し、全14回実施した。内訳は、特別展関連展示1件、各部門の企画展示7件、職員ミニ写真展1件・ひな祭りイベント（宮崎市立国富小学校合唱部ミニコンサート、宮崎商業高校書道部による書道パフォーマンス）1件、展示解説員の展示1件、博物館友の会の展示1件、他機関の展示2件であった。	3			

(4) 教育普及

項目	評価指標		29年度実績	内部評価			外部評価	
	内容	目標値		評価内容及び改善策	個別評価	総合評価	評価・意見	評価
①学校教育支援	学校受入校数	年200校	225校	・学校受け入れ校数は昨年度より大幅に増え、200校を上回り、授業支援、職場体験受け入れ、職員研修受入れ数は目標を達成できたが、資料貸出し校数は目標を達成できなかった。 ・授業支援は昨年度より増え、宮崎大学教育学部附属小学校、宮崎市立大宮小学校への対応が加わった。次年度は宮崎北高等学校のサイエンス科への支援を行う。 ・今後も計画的に学校教育支援に取り組むとともに、校長会や職員研修会などの機会を通じて、博物館の学校支援の取組みメニューや有効性について周知を図る。	3		①学校受入校数等は目標値を上回っており、博物館の取組が周知されてきた結果であると思う。今後も、実践的な職員研修プログラムの実施や積極的な学校への情報発信を期待したい。（明星視覚支援学校の生徒の職場体験を受け入れていただきありがとうございます。生徒へのきめ細やかな対応をしていただいたことに感謝いたします。今後も特別支援教育への御理解・御支援をよろしくお願ひします。） ②お忙しいのに、学生たちの支援まで大変だと思う。ありがとうございます。 ③さまざまな努力で数値目標は達成している。しかし、個別の内容を見ていくと、県外利用校もあるのに、高校がこの数字ではあまりにも少ないと思う。学校行事等の活用とともに、何より先生方に活用方法を知らせる必要もありそうだ。 ④目標値と照らし合わせてその実績を評価したとき、ほとんどの項目について期待通りに達成できたと言える。特に、展示解説・博物館講座・友の会との連携においては、学習対象者の実態、状況、発達段階等をふまえた内容で対応したと言える。 ⑤ほとんどの項目において指標を上回っているということは、工夫や改善がなされた結果と考える。具体的に携わっていないので詳細に答えることはできないが、明らかに実績としてあがっているということに、皆様方の努力がうかがえる。 ⑥専門性の高い内容でありながら、学校や関係機関との連携を効果的に図ったことで知識の広がり生まれ、興味・関心や利用しやすさまでにつながったのではないか。さらなるアピール活動を推進して文化向上に努めていただけるとありがたい。	
	資料貸出し	年10校	8校					
	授業支援	年10校	11校					
	職場体験受入れ	年5校	5校					
	職員研修受入れ	年5校	7校					
②展示解説	実施人数	年10,000人	9,703人	・展示解説を受けた人数については、目標の1万人に若干及ばなかったが昨年度よりも234人多くなった。また、展示解説を受けた方々の個人アンケートによると「満足した」「やや満足した」の合計が97.4%で、満足度が高かった。 ・例年目標値まで迫る実績であることから、今後も引き続き来館者への声かけや事前広報に取り組むとともに、利用者の興味や関心を高めるような解説を工夫する。	2		⑦目標値をやや下回っているが、満足度が高いことから実績としては評価できる。展示解説員制度や解説員の活動内容の広報に努められると、ニーズはあるので実績は上がっていくと思う。（体験型の展示や自由に触れることができる展示の充実をお願いしたい。） ⑧学芸員の方の説明がわかりやすく、児童は集中して聞いていた。クイズ形式で楽しめる展示物があったので、児童は興味を持って取り組んでいた。	
③博物館講座等	主催講座（地域講座含む）	年30回	41回	・主催講座は、普及講座（27回）と特別展関連講座（7回）、民家園伝統文化体験講座（4回）、どこでも博物館（3回）であり、地域講座数ともに目標をクリアすることができた。 ・受講者数については、博物館講座（普及講座、特別展関連講座）の他、民家園関連行事、どこでも博物館、教員のための博物館の日の参加者合計として3,040人となり目標を大きく上回った。 ・今後さらに、内容の充実と広報活動の工夫に力を入れながら、実施していきたい。	4		⑨博物館が主催する講座の広報を見ると、「参加したい」と思う講座が増えてきているように思う。受講者数が目標を上回っていることからそれがわかる。 ⑩講座も多く取り組んでいただいて、知らないことを知ったり、興味・関心を広げられると思います。	
	地域講座	年10回	12回					
	受講者数	年1,500人	3,040人					
④民家園の活用	民家園まつり	年1回	1回	・2月に穂北神楽公演、3月には「米良の民家」と「椎葉の民家」の保存修理完成披露会を兼ねて民家園春まつりを実施し、それぞれ多くの来場者があった。 ・毎週第3土曜日に開催している宮崎の昔話公演は、目標の10回を開催した。子どもから大人まで幅広い年代層に楽しんでいた。 ・その他の催事として、福祉施設と共催で風車フェスタ（7月）、愛好会と共催でレコードコンサート（3月）の他、民家園ボランティアによる昔の道具体験（5回）を実施することができた。 ・今後も多くの方々が楽しめる催しを実施していきたい。	3	3	⑪神楽の公演等民家園を活用して、いろいろな企画をされていることは評価できる。 ⑫民家園では、すべての棟の補修工事が終了し、今後有効に活用されることを期待したい。イベントだけでなく、休憩場所（できれば飲食の可能な）や民具・農具の体験型の展示などが考えられるのではないかな。補修工事の過程も展示されるとよいと思う。 ⑬博物館展示では、無形ものの展示は困難、映像による展示に頼るしかない。民家園を活用した県内神楽の披露事業は10年近くになると思われるが、昨年度の穂北神楽は近年の同事業のなかで群を抜いていた。青竹を30cm位の間隔で御神屋にめぐらし、注連柱や神棚など地元で行う神楽と同じに設え、手を抜かない舞も見応えがあった。5月末、同保存会の聞き取り調査（博物館事業と無関係）を行ったが、保存会長をはじめ会員から、総合博物館からの招聘に対する感謝と、若い伝承者にやる気・伝承意欲が芽生えたという言葉があった。民家園での披露機会に縄の結び方をはじめ正式な設えを行い、若い舞手に伝承したという。多くの観覧者は初めて見る独特の御神屋設定に驚いたことと思われる。高千穂神楽や椎葉神楽など名の知れた神楽以外に、県民にあまり知られていない神楽に注目したことは素晴らしいことと思う。今後も新たな発掘を期待する。	3
	伝統芸能公演	年1回	2回					
	宮崎の昔話公演	年10回	10回					
	その他の催事	年6回	7回					

⑤関係機関との連携	職員の派遣・招聘	年20件	153件	・植物、地質、考古、歴史、民俗、教育普及、資料保存など様々な分野の研究会や会議、調査等に講師や委員として職員を13件15回派遣し、関係機関等の職員の招聘が7件あった。資料貸出し及び資料借用または展覧会等で協力を得た関係機関は93件、視察・調査等で来館された関係機関は19件あり、連携を図った。 ・普及講座において串間市・新富町・日南市各教育委員会と共催で3件実施した。	4	⑭実績が目標値を上回っており、評価できる。各教育委員会との今後の連携を期待する。	
	資料の貸し借り						
	研究会への参画						
	共催事業等						
⑥博物館と福祉施設の連携	施設受入件数	年200件	321件	・福祉施設の来館は、展示解説員が主体となって認知症高齢者を対象に実施している「博物館で思い出を語ろう！」事業等の実施効果により昨年度比30団体以上増加し、目標を大きく上回ることができた。 ・今後も、福祉施設のニーズをふまえて事業展開を図っていく。	4		⑮利用状況を見ると、土曜日や夏季休業中における放課後等デイサービス事業所の利用が多い。障がいのある方達が利用している施設・事業所等との連携を進めていただきたい。 ⑯福祉施設との関係など、団体の受け入れを積極的にしていくということは、良いことだと思う。 ⑰さまざまな団体が出入りしやすくするためにも、中心となって動かれる方を効果的に協力者にすることも必要かと。当然やっていると思うが。
⑦レファレンス対応	相談件数	年1,000件	971件	・一般560件、マスコミ179件、公共機関124件、学校54件等からの相談が計971件あった。相談件数は昨年度より168件増えたが、目標値には若干届かなかった。 ・レファレンスサービスはホームページなどを通じて周知を図り、問い合わせには適切に対応していきたい。	2		⑱昨年度より実績数も114件増えており、ホームページ等を活用して、県民への周知の取組を進めていかれると相談件数に結びついてくると考える。
⑧研究発表会の開催	研究発表会	年1回	1回	・県内研究団体の発表会を3月に開催し、自然科学系の10団体が報告を行った。参加者は昨年度と同数の69人であった。本年度が9回目の開催となり、自然科学に関する情報発信の場として定着し、一定の役割を果たしている。	3		⑲県内の研究団体の発表会を企画していることは評価できるが、一般の参加者が増えることも期待したい。
⑨博物館友の会との連携	講師派遣 (博物館→友の会)	年5回	講師派遣4回	・学芸課職員の講師派遣は、「徳川歴代将軍名宝展」、「第37回SSP展」、「南極展」、「日本刀の美と歴史」展において計4回実施した。 ・また、友の会会員による博物館講座支援は、「よろい・かぶと着用体験！」など6回あった。 ・友の会まつりにおいては、館職員と友の会会員による展示を行い、友の会と連携して開催した事業も展開できた。	4		⑳博物館友の会の活動を広く県民に広報することで、会員も増え互いの活動が充実すると考える。
	講座支援 (友の会→博物館)		講座支援6回 計10回				

(5) 情報発信

項目	評価指標		29年度実績	内部評価			外部評価	
	内容	目標値		評価内容及び改善策	個別評価	総合評価	評価・意見	評価
①情報発信の充実	広報紙発行	年2回	2回	・広報誌「森の通信」を6月と9月の2回(62号・63号)発行し、県内の学校や博物館、図書館、公民館等の公共施設などに配布するとともに、ホームページにも掲載した。 ・博物館の情報を報道機関に提供する報道処理は62件、報道機関からの問い合わせで番組や記事作成につながった情報提供は179件の計241件であった。 ・今後は広報年間計画の作成と進行管理や広報戦略の見直しなどを行い、情報発信に努めていきたい。	4		①報道機関からの問合せに対する回答である「情報提供」は、受け身の業務であり、積極的な報道機関への情報提供である「報道処理」とは性格が異なるため、評価指標を分けた方がよいのではないかと。 ②さまざまな工夫により、関心度は上がっていると思う。積極的な取り組みを期待する。	4
	報道処理・情報提供件数	年120件	241件					
②ホームページの充実	更新回数	月5回	月10.5回	・博物館ホームページへのアクセスは、年680,006件となり、昨年度より17万件以上増え、目標値を達成できた。これは、ホームページのこまめな更新に努め、更新回数が昨年度の2倍以上になったこと、さらにSNS（Facebook、ツイッター）において、特別展や講座の様子、季節ごとの情報などを発信でき、情報発信手段として定着してきたことが要因と思われる。 ・引き続き、ホームページの新着情報での情報提供、SNS（Facebook、ツイッター）を利用したタイムリーで博物館の身近な話題提供など、情報発信に取り組んでいきたい。	3	3	③ホームページの充実については、アクセス数が目標値を大幅に上回っており、特筆に値する。更新回数が昨年度より2倍以上に増え、また画面も見やすく、努力の跡がうかがえる。 ④ホームページの更新、フェイスブック、ツイッターなどのSNSを活用した情報発信を行うなど、さまざまな工夫をしながら取り組んでいる。情報発信の回数も多く、常に最新の情報提供に努めている姿勢が見られ、今後も努力を続けていただきたい。	4
	アクセス件数	年500,000件	680,006件					

(6) 経営

項目	評価指標		29年度実績	内部評価			外部評価	
	内容	目標値		評価内容及び改善策	個別評価	総合評価	評価・意見	評価
①博物館協議会や県民の意見の尊重	アンケート収集件数	年2,000件	2,224件	・アンケートの収集件数については、2月から3月にかけて強化週間を設定するなど回収に努めるとともに、特別展の回収数も増えたため、目標値をクリアすることができた。さらに、本館サービスに対する満足度は84.1%となり、目標を達成できた。 ・今後もアンケートを積極的に回収する機会を増やすなど、利用者の意見収集に努め、館の運営に活かしていきたい。	3		①来館者アンケートでは目標値を超え、サービス満足度も高いことから、館員のご努力がうかがえる。今後も努力を期待したい。 ②アンケートは、利用者の博物館に対する感想や評価を把握する数少ない手段であるため、収集件数を増やす努力をしていただきたい。	3
	満足度	70%	84.1%					
②職員の資質の向上	—	—	①基本研修 ②県外研修等 ③展示解説員研修	・全職員を対象とした基本研修では、コンプライアンス、危機管理等について、4月、9月に実施するとともに、3月には学芸課職員による調査研究報告会を研修の機会とし、年3回実施した。県外研修として、関係職員が学芸員専門研修アドバンストコース、技術研修会等に参加した。 ・展示解説員の研修として、宮崎市・川南町・木城町の自然や史跡を見学するなど、各職員が様々なケースに適正に対応できるような環境づくりに努めた。 ・今後も引き続き館内外の研修の機会を確保し、職員の資質向上に努める。	3	3	③博物館の基本は人材であり、全職員を対象とした基本的な研修や学芸員・展示解説員の資質向上のための研修を充実させていただきたい。	
③危機管理体制の強化	防災訓練	年2回	3回	・年度当初の4月に、全職員を対象とした危機管理マニュアルに基づき危機事象への対処方法等の研修、9月には「防災の日」に合わせ、日向灘沖を震源とする震度5強の地震を想定した避難訓練と危険箇所の確認等、1月には埋蔵文化財センター分館職員と合同で民家園において「文化財防災デー」に合わせた防火訓練を実施するなど、職員の危機管理意識やスキルの維持・向上を図った。 ・今後も、利用者の「安全」「安心」の確保のため、危機管理体制の強化に努める。	4		④南海トラフによる地震や津波に対する来館者の誘導等の避難訓練も行って欲しい。	

(7) 全体を通じての意見

項目	評価指標		29年度実績	内部評価			外部評価	
	内容	目標値		評価内容及び改善策	個別評価	総合評価	評価・意見	評価
全体							①評価の数値は考古博物館と統一された方がよいと思われる。 ②各分野で目標値設定にあまりこだわる必要はないと思うが、いかがだろうか。 ③民家園の保存修理が完了したのは大変良かった。次に博物館本体の建替えを検討される時期を迎えているのではないかと推察する。貴館は平成10年にリニューアルされたが、随所に建設当初である昭和46年の設備のままのところを残している（たとえば来館者も利用する地階トイレは昭和そのもので、県外からの来客を案内することが躊躇われる）。加えてリニューアルからすでに20年が経過して、最新の保存技術等を十分に活用できるのか、また様々な設備が経年劣化を起こしているのではないかと懸念している。このような館の環境は、博物館にとって最も大切な収蔵資料の展示・保存管理・活用にも重大な影響をもたらしかねないのではなかろうか。自治体の財政事情は厳しいであろうが、放置しては改善されないと予想するので、県民の大切な文化資源を将来に継承するため、提案しておきたい。	